



新型コロナウイルス感染症対応下における 地域と学校の連携・協働の取組事例



令和2年6月（令和3年2月追加）

文部科学省総合教育政策局地域学習推進課



「放課後子ども教室でのオンライン体験活動」 (神奈川県 鎌倉市)

※令和2年11月追加

取組の概要や経緯

- ・鎌倉市では「出あう、つながる、ふるさとで自ら育つ」を放課後子ども教室（以下、「子ども教室」と表記）の理念として掲げ、地域を活かした体験活動を展開してきた。
- ・新型コロナウイルス感染症対策による子ども教室の休止をきっかけとして、オンラインでの取組の必要性が高まり、地域コーディネーター数名によるオンラインプロジェクトチームを発足させ、連携する大学等の支援も受けつつ、リアルタイム配信での体験活動を実施することとなった。

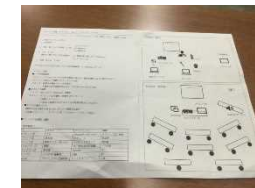


内容

- Zoomを使用した双方向の交流プログラム
普段から子ども教室で活動している地域団体やNPO、大学生らが講師となり、クイズやゲームを通して交流したり、工作や科学実験、英会話などの体験活動を行ったりしている。
- Facebookを使用した体験プログラム
子ども教室で実施した体験活動を動画コンテンツとして各施設で投稿し、子ども教室に来られなかった児童等への情報発信をしている。



月に一度、コーディネーターが実践を基にミーティングをしている。



ソーシャルディスタンスを考慮しつつ、交流が円滑に進むよう綿密に計画している。

ポイント

- オンラインプロジェクトチームが市内の各小学校を回り、リアルタイム配信のプログラムの技術支援をしている。活動は担当コーディネーターが企画し、現場の支援員が運営することで、役割分担を明確にしている。
- 講師は児童にとってもなじみのある地域人材に限定している。
- メインのPCに加え、複数のタブレット端末を併用することで、講師と児童とのやりとりが円滑に進み、交流している実感をもたせられるよう努めている。

鎌倉市立今泉小学校の様子。プロジェクターとスクリーンで大学生と子ども教室をつないでいる。

今後の方向性

- 新型コロナウイルスの状況を注視しながら、従来の対面型のプログラムとオンラインプログラムを両立し、ハイブリット化していく。
- オンラインプログラムを録画しアーカイブ化することで、対面型のプログラムの実施が再び困難になった場合にも子どもたちの体験の機会を失わないよう、アーカイブ化の検証を行う。
- オンラインならではの良さを活かした、遠隔での交流活動なども展開していく。

参加者の声

- 子ども教室支援員「1人ずつ順番に呼ばれ、マイクの前で答えを言っていく形式に緊張しつつも、答えられて嬉しそうでした。子どもたちにはとてもよい経験になりました。」
- 参加児童「大好きな大学生のお姉さんとまた交流できて、うれしかった。」「緊張したけれど答えられて良かった。クイズもすぐにわかったので楽しかった！」「ロケットの工作で、先生が褒めてくれてうれしかったし、質問にもたくさん答えてくれて、楽しかった。」

「おうちで★どようびーSaturday at home.ー」 (島根県雲南市)

※令和2年10月追加

取組の概要や経緯

- 平成26年度より市内の小学生を対象に、CIR（国際交流員）やALT（外国語指導助手）・AET（英語指導助手）を講師に、工作や料理などの体験を通じて、楽しみながら英語に触れる場として「どようび★えいご」を月1回実施してきた。
- 今年度はコロナ禍で対面での実施は中止したが、より多くの子どもたちが各家庭でいつでも楽しみながら学べるよう、動画コンテンツ「おうちで★どようび-Saturday at home.ー」を作成し、市の公式YouTubeでインターネット配信を実施。



ロゴもオリジナル

内容

- 動画配信は5月より月1回のペースで実施。これまで同様、季節に合わせた内容や、家庭でできるクッキングやゲーム、英語の早口言葉などの紹介を行っている。
- シリーズとして、「アルファベット博士」がアルファベットや言葉を紹介している。
- エピソード5では、雲南市のすてきな「ヒト・モノ・コト」を集めた、I love Unnan!-うんなん大好き！-を作成。視聴者が地域に目を向けてもらうきっかけ作り。



⇐ エピソード1のオープニング

地域資源を活用し、地域に目を向けてもらうきっかけに。
(エピソード5 加茂岩倉遺跡)

ポイント

- 市教育委員会（社会教育・学校教育）、国際交流員、教育支援コーディネーターなどが互いに協力して、動画の撮影や編集等を実施。
- 市内にある様々な資源を活用しながら、オリジナルの動画づくりを行っている。
- 市内小中高校や、雲南市に縁のある方などにも出演を呼びかけ、たくさんの方に関わってもらいながらつながっていき、親しみをもってもらえる番組作りを心がけている。

⇓ エピソード1



⇓ エピソード5
(I Love Unnan!)



視聴者の声

- 「子どもと一緒におやつを作ってみました。うまいかなかったけど、やってみることが大切ですね。」（保護者）
- 「番組を見たよ。次も楽しみにしています。えいごをおぼえたいです。」（小学1年生からの手紙）
- 「アルファベットのコーナーは大人にとっても発見があります。勉強になりますね。」（一般視聴者）

今後の方向性

- 市内小学校の英語学習を進める上でのヒントになったり、教材としても利用してもらえるようPRしたい。
- インターネットで番組に親しんでくれた子どもたちが、対面で実施したときに興味をもって再び参加してくれることを期待する。また、日々の生活の中で、子どもたちに「何かやってみようかな？」と思わせる、またその一歩を後押しできるような番組づくりを目指したい。

「本物に触れる体験“こうみん未来塾”おうちでできる取組み」

(兵庫県 三田市①)

※令和2年6月作成

取組の概要や経緯

大学・高等学校・博物館、企業や地域人材など、市のあらゆる人材と協働して、子どもたちに「本物に触れる」体験講座を開催するこうみん未来塾。(三田市の偉人「蘭学者 川本幸民」と、「公民」協働のまちづくりにちなんで名付けられた) 講座やイベントを自粛するなか、子どもの体験機会を確保するため、ネットを活用した取組を実施。

内容

三田市ホームページにて、「こうみん未来塾“おうちでこうみん”」(<https://www.city.sanda.lg.jp/sukoyaka/outidekoumin.html>)と題し、こうみんプログラムの一部を自宅で体験できるツールを紹介。ペーパークラフトやプログラミングツール、講師自作の動画や、博物館所蔵の貴重映像など、幅広い分野の多彩なコンテンツが集約されている。



ポイント

- こうみんプログラムを提供している講師から、自宅でも体験できる、プログラムに関連するツールを提供してもらっている。
- 動画やペーパークラフト等の著作物は、提供先に承諾を得て、現物を提供してもらったり、掲載元のホームページのリンクをはるなどしている。

参加者の声

- 講師「講座やイベントを自粛する中でも、プログラムを知ってもらう機会になった。」
- 講師「子どもの学ぶ機会・体験する機会を提供する新たな手法が見いだせた。」
- 保護者「子どもの興味の幅が広がることが期待できる。」



今後の方向性

- 高校との協働で、オンラインこうみん未来塾を計画している。
- 今後も講師から提案があれば、ネットを活用した取組を検討する。

「放課後子ども教室独自のホームページ、SNSの立ち上げ」

(兵庫県 三田市②)

※令和2年6月作成

取組の概要や経緯

市内20小学校中16校区で開催されている放課後子ども教室では、各地域が主体となって、寺子屋・子ども食堂・工作・将棋・英語・卓球・剣道・ゴルフ・書道・茶道・太鼓・コーラスなど工夫を凝らした地域の先生講座や、農園・防災・ハロウィン・クリスマスなど地域を巻き込んだ交流イベントを実施している。社会のあり方が変わってしまった今、子どもの学び、子どもとの交流を止めないため、ネットを活用した取組を実施。

内容

三田市ホームページにて、「放課後子ども教室“おうちで寺子屋”」(<https://www.city.sanda.lg.jp/outijikan0501.html>)と題し、算数が楽しく取り組めるプリントや親子クッキングレシピ、将棋の問題や家でできるトレーニング動画など、自宅で取り組めるコンテンツを紹介。地域の放課後子ども教室で休校支援をきっかけに立ち上げたホームページも紹介している。

ポイント

- 地域で活動されている方から、自宅で体験できる、地域の特色を活かした多種多様なツールを提供してもらっている。
- 市独自では既存の市ホームページでプリントや動画を掲載し、各放課後子ども教室では無料で作成できるサイトを利用している。
- 地域の方が作成した動画等の著作物は、製作者の了解のもと、ホームページに掲載したり、市のYouTubeチャンネルに登録している。

参加者の声

- 支援者「様々な活動を自粛するなか、子どもや保護者のために少しでもできることがあって、活動者自身が元気をもらっている。」
- 保護者「いろんなコンテンツがあって子どもの興味の幅が広がり、親子で取り組めば会話もはずむので助かっている。地域の人の温かさを感じる。」



↑ 地域の子どもの教室独自のホームページ



→ 支援者自作の動画配信

今後の方向性

- 現在も各放課後子ども教室から提案があり、今後も市のホームページや掲載内容が充実していくと予想される。
- 地域の放課後子ども教室の講座をオンラインで開催する企画がある。
- 地域の放課後子ども教室のホームページやSNSにて、子ども同士・子どもと先生がつながれる場や悩みごとを相談できる場を構築する計画がある。

「レッスンの動画配信による放課後子ども教室の取組み」

(岡山県 岡山市)

※令和2年6月作成

取組の概要や経緯

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、集まって練習することが不可能に。練習環境を失った家で過ごす団員のためにYouTubeでコーラスのレッスン動画の配信を始めた。「集まって歌う」ことが難しい状況が今後も続くと思われるので、各自が家で歌えるようにオンラインを利用して工夫して練習していく。



内容

放課後子供教室の指導者がレッスン内容をスマートフォンで録画したものをグループのみ閲覧可能にしYouTubeにアップ、活動に参加する子供の保護者に動画とURL情報をお知らせし、子供達に視聴してもらう。子供たちは各自、携帯やパソコン・タブレット等を用いて練習を行っている。



ポイント

- 動画の収録・編集には、専用機器ではなく、指導者のスマートフォンを使用。
- 通信は家庭のWi-Fi等を使用。録画用に、三脚にスマートフォンを固定するスタンドを購入。
- YouTube動画はコーラス関係者しか見られないように設定しており、デバイスは公共のものは使わないルールとしている。
- 毎回キーワードが隠されているなど子供の飽きない工夫が盛り込まれている。

参加者の声

<児童生徒>

- コーラスの仲間と集まって練習ができず悲しかったが、家で先生のレッスンを受けながら歌うことができてうれしかった。
- 先生がわかりやすく編集をしてくれているので、おもしろい。

<指導者>

- 仲間と一緒に大きな声で歌える通常の練習に勝るものはないが、通常練習が再開されるまでオンラインレッスンという手段で心を繋いでいくことができた。

今後の方向性

YouTubeでの生配信やZoomを使用したりアルタイムでのオンラインレッスンを検討中。YouTubeでは一方的なレッスン内容になってしまうことや、Zoomでは音声の伝わり方にタイムラグが生じるなど課題がある。

※コーラスに使用する楽曲については権利処理を行ったうえで使用している。

地域と学校がともにつくる学習支援動画

(白川郷学園／岐阜県白川村)

※令和2年6月作成

取組の概要や経緯

- ◆ 義務教育学校である白川郷学園では、1年生から9年生までのすべての学年に地域コーディネーターが配置され、日頃から地域と学校がともに学校づくりを行ってきた。
- ◆ 学校の臨時休業中、学校では子供たちの学びを確保するためにオンライン授業を展開。
- ◆ また、学校再開時に「ふるさと学習」がスムーズに進められるよう、教職員と地域コーディネーターが打合せを進めている。

内容

- ◆ 7年生の学習について、教職員とコーディネーターが「今すぐできることはないか」「学校再開後に活かせるものはないか」と考え、『地域の担い手10分語り（動画）』と題し、地域コーディネーターが地域人材を選出し、動画を作成している。
- ◆ 作成した動画は休校中はもちろんのこと、学校再開後の朝の会や帰りの会での視聴を想定。

ポイント

- ◆ 学校に行かなくても子供たちの学びに関わることが出来る。
- ◆ コーディネーターが地域の方の自宅等を訪問して撮影するため、地域の方は関わりやすくなる。
- ◆ 地域の方の繋がりを最大限に生かした地域教材ができる。
- ◆ 地域学校協働活動への新しい関わり方のスタイルを確立し、より多くの方にその良さや意義を広めることができる。

参加者の声

- ◆ 「この状況の中で子ども達のためになるのであれば、恥ずかしいけれどやりますよ。」
- ◆ 「これまで学校とはほとんど関わりなかったけれど、こんなかたちで私たちの思いを伝えられるのであれば、とても嬉しいです。これを機に職場体験があればぜひ来てください。」



今後の方向性

- ◆ 動画視聴後、生徒が興味をもった内容については更にインタビューや体験などの学びを進められるよう、出演者にはコーディネーターから事前に依頼済。（オンライン等での学習も可）
- ◆ 今回の状況に限らず、動画による教材収集は今後も継続し、より多くの村民に子供たちの学びに関わっていただける機会としていく。

オンラインでの学校運営協議会の開催

(三鷹の森学園コミュニティ・スクール委員会／東京都三鷹市)

※令和2年6月作成

取組の概要や経緯

- ◆ 三鷹の森学園コミュニティ・スクール委員会は、3校（1中学校・2小学校）の学校運営協議会で、23名の学校運営協議会委員（うち2名は地域学校協働活動推進員）と4名の事務局員の合計27名で構成されている。
- ◆ 年度当初に学園の経営方針と各学校の経営方針の承認を行う委員会の開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により延期を余儀無くされていた。しかし、経営方針の承認をできるだけ早く行うべきとの判断から、地域側からの提案により一部リモートによる委員会開催が実現した。

内容

- ◆ 各校長と学校運営協議会会長、副会長、事務局、市教育委員会担当者が小学校に集まり、その他の委員はリモートで参加。
※ 小学校への出席者も3密にならないよう対策を講じた。
- ◆ 現在各学校が行っている感染症対策や具体的な学校の対応方針が共有された。
- ◆ 協議により、学園の経営計画に新型コロナウイルス感染症対策の徹底に関して盛り込まれることになった。

ポイント

- ◆ この状況だからこそその協議を行うことができた。
- ◆ 学校運営協議会の会長が中心となりWEB会議の環境を整えるなど、新しい取組に前向きな委員が多かった。

参加者の声

- ◆ 前例にとらわれず「今できること」を委員と学校で熟慮した結果、コミュニティ・スクール委員会で「新しい生活様式」を体現する素晴らしい取組になった。
- ◆ リモートであっても、顔を見て情報・意見交換ができ、結論だけでなく、そこに至る経緯も知ることができたことで、「お互いの信頼関係」が一層深まった。



今後の方向性

- ◆ 学校運営協議会のリモート開催の試みについては、今回の感染予防対策に限らず、今後も協議・情報共有等の手段としての活用や、コミュニティ・スクールの活動に、より幅広い地域人財の参加を促す契機となる可能性が考えられる。これらの可能性を踏まえつつ、今後について模索していく。

オンラインによる「地域とともにある学校づくり」研修会の開催

(京都府南丹市教育委員会)

※令和2年6月作成

取組の概要や経緯

- ◆「新型コロナウイルス感染症への対応が各学校園に求められる今だからこそ、学校運営協議会の必要性や地域との連携・協働の重要性について研修会を行いたい」という市教育委員会の強い思いにより、市内の幼・小・中学校長向けの「地域とともにある学校づくり研修会」を開催。南丹市は、H27年度から市内全小学校7校にコミュニティ・スクールを導入。その成果と課題を踏まえ、R2年度から市内全中学校にも順次コミュニティ・スクールを導入し始めたところで、今回のコロナ禍となったが、上記の理由で研修会を企画した。

内容

- ◆ コロナ禍において、子供たちをどのように守り育てるか、このような状況だからこそ地域・保護者・教職員が想いを共有してどう取り組むか、学校運営協議会をどのように活用するかについて、現役小学校長のCSマイスターから具体的実践を聞き、意見交換を行った。
- ◆ コミュニティ・スクールや地域学校協働活動の実践者を各地に派遣し、各地の取組を後押しする文部科学省の「CSマイスター派遣制度」を活用し、CSマイスターが研修会にオンラインで参加した。事前の打合せもすべてオンラインで実施した。※CSマイスターのオンラインでの「派遣」は初の試み。

ポイント

- ◆ コロナ禍で広域の移動が制限される中でも一番必要なタイミングで必要なお話をしてもらえる講師を遠方から（福島県⇄京都府）招聘することができた。また、オンラインで実施したことで、講師の移動に係る負担が減り、研修会開催の時期を柔軟に調整できた。

参加者の声

- ◆ 同じ立場である校長先生のお話を聞くことができ、ねらいや悩み、障壁となるものなど、参考になる点が多々あった。先日の経営方針の承認を得たという経過を経ても、保護者・地域にしてみれば、やはり学校のことは学校が決めて進めるという感覚からは脱し得ない部分があると思う。しかし、大きな関心事についても、決定の過程に関わっていただくことで、説得力が増すとともに、協議会の認知度や関心も高まることを教えていただいた。



今後の方向性

- ◆ オンラインによる講師の招聘が可能で、その効果も十分になることが確認できたため、研修会の年間計画を立てる中で、適宜オンラインを活用し、全国の様々な実践者や有識者など、多くの視点を取り入れていく。
- ◆ オンラインによる研修と実際に集まって行う研修のベストミックスを模索していく。

「地域住民による消毒ボランティア活動」 (長野県 伊那市)

※令和2年10月追加

取組の概要や経緯

伊那市では新型コロナウイルス感染症への感染予防策として、養護教諭や担任教諭が校内の消毒作業を実施していたが、教職員の負担が大きくなっていることから、学校から地域住民に協力を呼びかけたところ、地域住民から積極的な申し込みがあり、地域学校協働活動として消毒ボランティア活動を行っている学校がある。

内容

伊那市内の小学校2校にて、地域住民による消毒作業が行われている。消毒箇所は教室をはじめドアノブや手すり、蛇口など児童が触れる部分。作業は児童が下校した放課後行われ、1日の参加人数は平均2人程度。消毒作業の参加者は地域で日中家にいる地域住民を中心に都合がつけば保護者も協力している。

ポイント

- 「困り事があれば地域の方と相談できる」という関係が昔からあったので、新型コロナウイルス感染症対策についても適宜相談し、地域住民による消毒作業に係る体制作りが可能であった。

参加者の声

- 教員「顔見知りの地元の方で安心感があり、学校中に感謝の言葉と意識の広がりが見られた。児童は身近な地域住民が活動している姿を見て、自然と手洗いや消毒の習慣が身につく、活動前までは負担に感じていた感染予防策に前向きになっている。」
- 教員「地域の皆さんが消毒をしてくれるので、教員は通常業務に専念できる。働き方改革にもつながっていると思う。」
- 地域住民「消毒ひとつとってもこんなに労力を要するのだと体験してわかった。これからも地域でできる事はどんどん声をかけて欲しい。子どもたちのために自分たちができる事を行うことで、自分たちのやりがいや生きがいにつながると同時に、学校と地域、保護者との連帯感がより一層高まったと思う。」



今後の方向性

- ボランティアの方の姿をととして、これまで以上に地域連携を日常の授業や学校生活に取り入れ、学校教育活動の幅を広げていくことができるのではないかと感じた。地域とともにある学校の在り方について、今後地域と協議を重ねていきたい。
- ボランティアの方に頼るばかりでなく、児童も消毒作業を行う試みや整理整頓の意識など、自分たちで出来る事を進んで行う取組みをしたい。

「保護者・地域住民による清掃・消毒活動」 (神奈川県 厚木市)

※令和2年10月追加

取組の概要や経緯

厚木市では、平成26年度からモデル校3校にコミュニティ・スクールを導入し、平成30年6月に全市立小・中学校36校に導入が完了した。
新型コロナウイルス感染症への学校の対応として、教員による毎日の清掃・消毒を行っていたが、教員の負担を減らすため、学校運営協議会やP T A本部、学校の呼び掛けに応じた保護者や地域住民による清掃・消毒活動が始まった。

内容

厚木市の全市立小学校23校の半数以上において、保護者・地域住民による清掃・消毒が行われている。多くの場合、全児童が帰った放課後に実施しており、作業の参加者はP T Aの保護者や地域住民など。



○鳶尾小学校で、手洗い場や玄関などを清掃・消毒する地域住民の方々



ポイント

「共有」「熟議」「協働」の実現！

- 学校運営協議会で、教員の負担軽減という課題を「共有」し、「熟議」した結果、地域と学校が「協働」して、清掃・消毒活動に積極的に取り組んでいる。
- 活動の実施に当たっては、学校側から希望がある場合と、保護者や地域住民が自発的に手を挙げる場合とが見られる。
- 学校運営協議会の導入により、学校と地域住民との距離が近くなり、地域学校協働活動についても相談や連携がしやすくなっている。

今後の方向性

- 参加者の感染リスクが心配されるため、感染症対策を徹底するように呼び掛けながら、活動していく。「無理のない範囲で、学校の先生と一緒に学校を綺麗にする」という趣旨が、広く行き渡ることが大切であり、学校運営協議会などを通じて、共通意識を地域に広げていく。

参加者の声（鳶尾小学校）

- 教職員：ボランティアの方々のお陰で、子どもたちは毎日清潔な環境で安心して学習できている。地域の方々に深く感謝するとともに、活動中の挨拶や何気ない会話を通して、地域との絆がさらに深まっていくことが嬉しい。
- 地域住民：普段、学校と接触する機会が少ないが、活動を通して、多くの地域の方が学校に馴染むことができ、絆を深められた/階段や水回りの清掃や消毒など、短時間ではあるが、役に立てばうれしい/非常事態の中で少しでも子どもたちのため、先生方の負担軽減の支援になれば嬉しい。地域と学校が一つになって進むことが大切だと思う。



学校動物の飼育活動を通じた開かれた学校づくり (東京都西東京市立保谷第二小学校)

※令和3年2月追加

取組の概要や経緯

- 西東京市立保谷第二小学校では、長年にわたって学校における動物飼育活動に積極的に取り組んでいる。
- 学校休業日には子供たちに加え、地域や保護者の方々、卒業生等が飼育活動に協力しており、地域と学校の連携・協働のもと、学校動物の飼育に取り組んでいる。

内容

- 4年生を飼育活動担当学年と位置付け、学校教育課程の内外において1年間責任をもって学校動物の飼育活動を行っている。
- 特に新型コロナウイルス感染症の影響による学校臨時休業の際は、おやじの会を中心とした地域の方々の協力により、学校における動物飼育を平時と同様に行うことができた。

ポイント

- 学校、子供、保護者、地域の役割分担を明確にすることにより、教員の働き方改革につながるうえ、保護者や地域に対して開かれた学校となっている。
- 保護者も参加する「親子ふれあい教室」を開催し、子供とともに保護者が学校動物と触れ合う機会を設けることで、飼育活動の意義や目的を共有し、協働意識を高めている。
- 年間を通じて、学校の教育課程の内外で地域の獣医師による授業や飼育活動における支援を受け、子供は楽しみながら日常的に生命の大切さを学ぶとともに、豊かな心が育まれている。

参加者の声

- 「先輩に教えてもらいながら、いろいろな人と協力し合い動物を育てていくことは、とても楽しいです。」(4年生児童)
- 「緊急事態宣言後の学校休業期間中に、動物の命を守る飼育活動に関わり始めたことにより、学校へ足を運ぶ機会が多くなりました。」(保護者)
- 「動物飼育により、保護者の皆さんが頻りに学校へお越しいただくようになり、子どもへの声掛けや見守り強化にもつながりました。」(教員)

取組の効果・今後の方向性

- 動物飼育活動を通して、子供・保護者・地域・学校の連携・協働の絆が強まった。
- 子供の「命を大切にすること」と「豊かな心」を計画的に育成することができている。
- 今後も、動物飼育活動を、高学年になる自覚をもつ段階である4年生の学校教育課程に位置付ける。



したのやムラの「しーた」と「のーや」 ©T&K/西東京市